

令和5年度教育研究改革・改善プロジェクト 採択一覧（採択件数：15件、総額4,405千円）

	代表者名	所属	プロジェクト名称	プロジェクト概要
3	木田 泰介	附属特別支援学校	これからの時代に求められる知的障害特別支援学校の専門性を高める単元及び授業づくりの在り方に関する実践研究（1年目）—大学附属・京都府・市公立特別支援学校の授業交流を通しての試み—	近年、特別支援学校においては経験豊富な教師の人事異動や定年退職により、学校としての専門性が蓄積されにくいこと、学校として高い専門性を担保・共有するための仕組みづくりの必要性が指摘されている。京都においては、大学附属・京都府・市で単元・授業づくりに対する考え方や過程が異なり、専門性を担保・共有するためにまずは三者間で相互理解を深める機会が要る。そこで、大学の独自採用、京都府・市の人事交流教員で構成される本校を基幹校とし、計画的な授業交流を通して互いの単元・授業づくりの過程を比較・分析することで、これからの時代に求められる知的障害特別支援学校の専門性を高める単元・授業づくりの在り方を検討する。
4	市田 克利	教職キャリア高度化センター	教員養成系における教師の授業改善に向けたICT活用指導力育成の取組に関する研究	本プロジェクトは、将来教員をめざす本学学生に対して今後必要となる教師の授業改善に向けたICT活用指導力育成の取組に関する研究を行う。 具体的には、ICT活用指導力の育成に向けて、GIGAスクール構想の推進下にある全国、京都府・市、本学附属学校園のICT活用状況を把握し、今行われていること、今後必要となることを学生に分かりやすく授業や講習会で伝える。さらに授業においては、随時口イロノート等の学習支援ソフトを使用し、基本的な操作をマスターさせることや、附属学校園と連携した取組も行う。また、講習会では京都府・市等の現職教員によるICTを活用した授業体験、教科書出版社によるデジタル教科書体験を行う。
8	小澤 雄生	附属京都小中学校	技術科プログラミング学習における次世代の学びを目指したプロジェクト学習の研究	技術科として、小・中学校でプログラミング学習の土台を築いてきた。系統的なカリキュラム開発を行い、現在はPythonを学習している。学習形式は、教授型の授業で行っていた。しかし、幅広い情報分野は、知識・技能の網羅が難しい実態があった。そのため、問題解決と知識習得型授業に切り替えた。 最近の実践より、プログラミング学習は、プロジェクト型学習の方が個別最適な学びになり、もっと良い成果が現れると分析した。この実践研究は、生徒の理解度や熱意、知識・技能の飛躍的な増加が期待できると考える。また、資格等への挑戦や「プログラミング学習追求」の研究にもなる。さらに、学習法の修得は、実行力等で他教科へも転移可能かを研究する。
9	鈴木 英太	総合教育臨床センター	京都府内における特別支援学校のセンター的機能の実態調査と支援プログラムの開発	本プロジェクトは京都府内の特別支援学校のセンター的機能のうち、通常学級における発達障害等の幼児児童生徒への支援を対象にしたものに焦点を当て、その実態把握から成果と課題を明らかにするとともに課題を改善する支援プログラムの開発を目的とする。 本学に新しく設置された「学びサポート室」の幼児児童生徒育成担当部門・他機関及び地域連携支援部門は、附属学校および京都府・市公立学校、福祉支援機関と連携し、子どもたちへの支援を充実させることを目的としている。本プロジェクトでは特別支援学校のセンター的機能を有機的に機能させるための「学びサポート室」のプログラム立案へと還元するものである。
10	西村 佐彩子	教育学科	教職大学院フィールドワークにおける臨床心理学的な授業観察法の効果的な活用	本プロジェクトは、教職大学院・共通科目「生徒指導・教育相談に関わる領域」で実践する附属学校におけるフィールドワークに、臨床心理学的な授業観察法を導入する意義及びその方法と教育効果について検討することを目的とする。教育現場における従来の観察対象を焦点化した観察法と異なり、本観察法は子どもと教師の情緒的交流の理解と探索に主軸を置いた観察法である。本観察法のねらいと方法を明確化した上で、①院生への教育効果の検討を通して教職大学院での実践における改善点を見出し、②本観察法の効果的な活用のためのわかりやすい手引き冊子の作成を行い、フィールドワークの実施の際の附属学校との円滑な連携のために活用する。
11	井上 美鈴	附属桃山小学校	教師を目指す学生や教師の情報活用能力を育成する研修開発—学び続ける教員を支えるコミュニティの構築—	学び続ける教師を目指し、教師を目指す学生や若年教師に対する教師研修を開発、実施する。GIGAスクールが2年目を迎えたが、授業における効果的なICT活用に不安が残る声が多い。その声に対応するためこれまで研修講座を開発、実践し、大きな成果を上げてきた。しかし、それらは単発の研修に終わっていた経緯がある。本年度は、研修だけでなく、参加者と一つのコミュニティを構築する。その中で学生には、教師を目指す上での不安の軽減や質の高い学びを提供していく。若年教師には、働いている中で課題や悩みを共有し、よりよく働けるためのサポートを行う。研究者自身が主体となり、学び続ける教師を継続的に支える研修を開発していきたい。
13	平島 和雄	附属京都小中学校	博物館連携による「わくわく」感のある学びのデザイン	学習指導要領では、博物館など社会教育施設との連携、協力が求められているが、十分な連携が実現されていない。また、「主体的」「協働的」「対話的」などのキーワードが学びのデザインやICT機器環境のデザインが目目されている。本校は、義務教育学校であり、小中を通じた学びを実践している。この環境を生かした学びを学習内容となげ、標本など博物館で用意の財産を単元縦断的に教材化し、「もの」の持つ魅力を子どもたちに実感できるようにし、「わくわく」感を高め小中を通じた学びの有用感を高めることを目指す。この「わくわく」感を広めるために研修会を開催するとともに、学会や論文等で発信していく。

	代表者名	所属	プロジェクト名称	プロジェクト概要
14	染谷 藤重	英文学科	英語学習者のエンゲージメント向上を目指す教育改善プロジェクト—説明的順次混合研究法を用いた実践的研究を通して—	本研究の目的は、協同的タスクを中心としたアクティブ・ラーニング型の授業実践が、外国語及び教科（外国語）の指導法の科目において動機づけ要因及びエンゲージメントを向上させるかを縦断的量的デザインを通して明らかにすることである。さらに量的データから個人を抽出し、自由記述の分析及び半構造化インタビューによる質的デザインを用いることにより、実際にどのような場面で、どのような指導がエンゲージメントの向上を促したかを検討する。説明的順次デザインの混合研究法を通して検証した結果をインパクト・ファクター（IF）となる国際誌の掲載を目指す。本研究によって得られた結果の発表を通して、本学の教育及び研究の質の向上を目指す。
15	大賀 玲子	附属京都小中学校	アフターコロナにおける子どもたちの運動能力の資質を高める効果的な体育授業に関する研究	本プロジェクトの目的は、コロナ禍で体力・運動能力が低下した生徒の運動能力の資質の向上につながる効果的な体育授業を提案することである。この目的の達成に向けて、①各競技のプロフェッショナルコーチ（以下、プロコーチ）の指導が生徒に与える影響と指導法の分析、②保健体育科教員の専門的指導力を高める教員研修、③：①と②に基づく体育授業の実践による生徒の変容と教員の授業力の変化の分析を下位課題として設定して全体のプロジェクトを進めていく。なお、本プロジェクトにおける運動能力の資質とは、身体的能力、技能、心理的特性、健康状態など運動に関わる様々な要素を包括的に表すものとする。
16	Andrew Obermeier	英文学科	iLearn. Kyotoの確立に向けて一全学英語科目に導入する事前準備の最終確認—	プロジェクトの目的は『iLearn. Kyoto』という世界で最も高度なICT学習管理システム（Moodle®）を採用し、大学の全学英語科目を強化することである。本プロジェクトは3年間のプロジェクト最終年度である。 具体的に、初等英語科教育では、iLearn. Kyotoの機能のデジタルフラッシュカードを使用した教室英語の体系的な学習支援と小テストの管理を行います。必修英語科目では、330人の学生が国際バーチャル交流会と図書館での英語多読学習を行う。具体的に1年生は世界中の異なる国々からの1万人以上の英語学習者と200人以上の大学英語教員が参加する国際バーチャル交流会に参加する。2年生は1000冊以上の書籍の内容をクイズ形式で問われ、個別に自律的な多読学習を強化します。
19	神崎 友子	附属桃山中学校	中学校への円滑な接続をめざした高学年と中学生との「令和の協働的体験学習」	附属桃山校園では2021年度までの20年間で、教員だけでなく各校園の子どもが協働的に活動することによる連携教育の有用性を全国の学校関係者に発信してきた。 今回は未実施である6年生が中学校での学習や生活に適應して、学びの質を高めていくためのプロセスについて研究する。教科で連携プログラムを作成し、児童のモデルとなる中1から中3の生徒と協働的体験学習をすることで、中学生の学び方を知り、中学生活へのビジョン形成が期待できる。また児童のアンケートやエピソード記録をもとに、中学入学後も含め2年のスパンで見取る。接続が上手くいった事例、つまづきを予防できた事例などを分析し、汎用性のある小中接続の実証研究を行う。
21	佐々井 美波	附属特別支援学校	特別支援学校における文化芸術活動の活性化 —「本物に触れる」機会の創出・拡充—	昨年度、教育研究交流会議音楽分科会にて音楽科の大学教員との連携を図り、児童生徒の「本物に触れる」機会を創出するためのプロジェクトを遂行した。本年度も継続して、障害をもつ児童生徒の特性等に配慮しながらプロジェクトに取り組む。昨年度の反省を踏まえ、本年度は年度初めに年間スケジュールを明確にし、大学教員の助言を受けたり、参画する学生の得意を活かしたりしながら日々の授業実践・改善を繰り返す。また並行してプロミュージシャンの「パノラマとラボラトリー」様に「音楽ワークショップ」の委託をする。児童生徒の興味関心や取り組んできた授業内容等を踏まえて十分な話し合いを重ね、本年度秋のイベント開催を目指す。
22	壇 律子	附属幼稚園	就園前から架け橋期を見据えた、教育課程のあり方について	校種を越えて子どもの発達を見通せる教育の実現を目指し、就園前から就学後を見据えた教育課程のあり方について研究していく。「幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながる（幼稚園教育要領5-1）」ことを意識して、週案作成・検討、保育の実施、事例収集・検討を行い、スタートカリキュラムを見据えた幼稚園の教育課程を作成する。また、子どもの発達の連続性を考えると、就園前の子育て支援も大事にしていきたい。令和4年度より大学との連携により始まった「ことり広場」をより多くの子どもと親子が集える場になるよう地域に広げた子育て支援を展開する。その中で、就園前の子育て支援のあり方やニーズを探っていく。
23	若松 俊介	附属桃山小学校	ICTを「学びの道具」に転換する授業及びシステムの開発	本プロジェクトでは、ICTを用いて社会構成主義的学習観に基づいた児童生徒中心の学びを実現するための授業及びシステムの開発を目指す。即ち、ICTを「教える道具」から「学びの道具」へと転換させることを目標とする。 (1)先進自治体・学校を調査し、(2)ICTを用いた授業実践事例を収集して学齢や発達段階に応じた利活用のあり方を分類・分析し、体系化するとともに事例集として全国の教員に発信する。(3)これらをもとに、ICTを「学びの道具」として活用する授業・システムを開発し、実践する。全校種を通じて学齢や発達段階に応じたICT活用モデルの構築・発信を目指す。まずは小・中学校の接続・連携に焦点をあてる。
25	原田 信一	産業技術科学科	技術科の授業における対話的活動を取り入れた授業実践に関する研究	技術科の4つの内容（A:材料、B:生物、C:エネルギー、D:情報）について、思考ツールを用いた対話的活動を導入し、探究的で生徒の「深い学び」を実現していくための方略を検討する。加えてプログラミング教育の小・中・高各校種間連携・一貫教育推進のための技術・情報教育課程の実態を調査し、その改革について検討する。まず、附属中学校で調査し、生徒の実態を把握・分析し、思考ツールとしての教材開発、及び指導法を検討し、対話的活動で生徒相互に多様な視点で学び合い、探求的な学習を目指した実践的・体験的なカリキュラムを検討する。研究成果は、学会等で発表し、京都教育大学及び附属学校としての使命を果たしていく。